



# 見田宗介における社会構想の社会学——人間の可能性の理論

徳宮，俊貴

---

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8524号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482272>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



# 論 文 内 容 の 要 旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

見田宗介における社会構想の社会学——人間の可能性の理論

氏 名 : 徳 宮 俊 貴

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 白 鳥 義 彦 教授

(副) 平 井 晶 子 教授

(副) 安 倍 里 美 講師

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

本研究は、「社会構想の社会学」の可能性を探求するための基盤となる理論枠組み（theoretical framework）の獲得をめざして、見田宗介（1937-2022）の理論と思想の内在的読解をふまえた発展的再構成を試みるものである。

序章「社会構想の社会学と見田宗介の人間解放論」では、はじめに社会構想とはなにか、社会学は社会構想にどう関与できる（と考えられている）かが確認され、つづけて見田の人間解放論の構成、ならびに社会構想の社会学に対する見田の射程と限界が検討される。社会構想の社会学とは社会思想・哲学と社会（科）学のインターフェイスをにないという理論分野であり、その主題は（1）一人一人の生きられる困難をその時代その社会の構造的な問題として巨視的に把握しなおすとともに、（2）人間存在の原論的な考察をつうじて望ましい社会の（自己批判に開かれた）原理的なイメージを提示し、問題の克服に展望や方向性を与えることで、（3）主体的な変革実践を連鎖的に触発することである。見田の人間解放論は、（1）現代化日本（高度成長期）における倦怠感と虚脱感のリアルタイムの観測から出発し、それを近代社会の存立構造にまでつきつめニヒリズムの問題としてとらえ返したうえで、（2）コンサマトリーと交響という独自の概念によって近代をのりこえる人間観を提示し、全体社会のもっとも単純化されたモデルとして交響圏とルール圏を構想しただけでなく、（3）その理論を真木悠介という文体でつづることでもって読者たちの触発を試みた点において、社会構想の社会学の先駆をなす。

第1章「見田の理論と思想をどう読むか」では、見田の著作にもぐりこむ事前準備として、それらがどう読まれ、論じられてきたかが概観されたうえで、本稿における読解の視角が設定される。直接あるいは間接に見田の影響をうけた著作は無数に存在するが、見田の理論や思想そのものを主題化した研究は着手されたばかりで、管見のかぎり蓄積がほとんどない。イメージ先行で論拠にとぼしい解釈が横行し、曲解や俗論や悪用をふりおとす一定の基準さえ存在していないのが現状である。見田の所説をめぐる学術的に建設的な討論の場を整備するためには、イメージ（のみ）にたよった我流の解釈をみだりにうちあうのではなく、概念の内実を見田の論述に内在しつつ精緻化または再構成し、一定の共通理解を形成したうえで批判的にのりこえてゆくという、腰をすえた地道な読解作業こそがまず必要だろう。見田の独創的な概念や理論や思想に対して、その内実と可能性の中心とを把握し再構成するうえでは、一書ごとの字面や背景に過敏にこだわるより、むしろ行間・著作間をこえたメタ的なしこやかな思考の地下水脈にまでかぎりなく肉薄し、理解の母型を獲得したのち、ひるがえって個々の所説の布置を系統だててゆくような、そういう作業こそが求められる。

第2章「豊かな社会の倦怠と虚脱」では、見田の初発の問題意識がふりかえられ、若き見田が、高度成長期日本（「夢の時代」）の大都市部（ゆたかな社会）にすくう倦怠感と虚脱感のリアルタイムでの観測から出発したこと、この作業が見田の思索の堅固な土台を形成し、後年の人類史規模の社会認識＝社会構想にいたるまで着想の源泉でありつづけていることが指摘される。

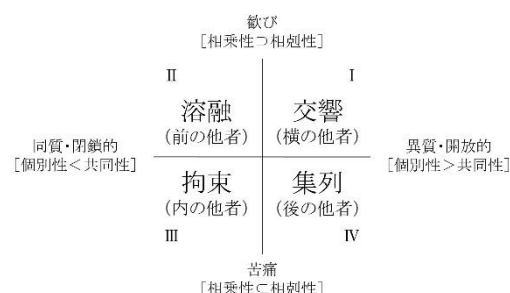
第3章「ニヒリズムの存立構造——集列性・交換価値・手段主義」では、現代社会の虚脱感を近代の不可避の帰結であるニヒリズムの問題として追究した見田の存立構造論が読解され、この根本問題を見田がどんな方向へのりこえようとしたかが跡づけられる。集列性とよばれる関係態を原基とする社会では、貨幣や時間に象徴されるように質的な多様性・多元性を抽象された数の物神化が生じて、世界が可算化され可換化されるにつれ人々の関心は空洞化し遠隔化し、現在の意味をよりとおい未来の成果に求める手段主義におちいるわけだが、このとき未来にある死によって現在のすべてが無意味化・空虚化してしまう。見田はニヒリズムの乗りこえを、個々の事物の質的な具体性・固有性（かけがえのなさ）を感受する能力の再建とも称すべき方向に展望していた。それを嚮導する概念こそ、「コンサマトリー」と「交響」である。

第4章「コンサマトリー概念の再構成——脱効用のエクスタシー」では、現在をたのしむといった平板な意味で理解されがちな見田のコンサマトリー概念が、もっと縦深的な、効用性を脱して「尽きなく存在すること」への衝迫という含意をおびていることが考証されたのち、当概念と解放理論＝社会構想との関係性が推察される。“consummatory”と対をなす“instrumental”がたんに未来志向を意味するだけでなく功利や効用を含意することから、ひるがえってコンサマトリーが非効用性（あるいは脱効用性）への欲求を含意すること、つまりバタイユの〈消費〉概念のもつ焼きつくすこと、燃えつきることという意味をとまなうことがわかる。自己を灼きつくさんとする宮沢賢治の願望は、自己犠牲の効用性をこえて個我の外（〈世界〉）に出で立つこと（ecstasy）自体への衝迫力すなわち「裂開」の機制に由来するわけだ。コンサマトリーな現在を尽きなく存在するにあたって方向性をあたえるフィクションとして、社会構想は要請される。コンサマトリーとは、自己の生の解放と社会の未来の構想とを弁証法的に架橋する概念なのである。

第5章「交響の弁証法——他者と出会う歓び」では、見田の社会理論および社会構想の中核をなす交響概念の内実が、他者との関係をめぐる諸概念との布置とあわせて把握される。まず溶融・対・交響という構図の一貫性が確認されると同時に、相乗性＝裂開＝溶融という理路が跡づけられ、交響を相乗性とむすびつける理解がたちゆかないことが指摘される。これをうけて相剋性と交響との関連がさぐられ、相剋性の因子（他者性・異質性）との出会いこそが交響の体験であるという示唆をえたのち、相乗性の磁場による相剋性の因子の反転が吟味され、交響が相乗性か相剋性のどちらか一方ではなく、反転の動態全体を含意することが考証される。最後に見田の外化・内化論を経由することで、溶融の局面と自立の局面とを往還する螺旋状の位相運動として当概念が定位される。交響とは、異質な他者との出会いによって個我が裂開し存在の〈世界〉へと内化する瞬間的な様態と、これによりいっそう相互に異質化した個として社会的現実の「世界」へと外化する様態とを往還するはてなき螺旋運動から、そのつど新鮮に立ち上ってくる弁証法的な他者関係にほかならない。

第6章では、以上の知見をふまえ、見田の全体社会構想の独自性と意義と射程が、多文化

主義理論および親密圏概念との比較をとおりて再検討される。「交響圏・間・ルール圏」という見田の全体社会構想は、今日の多文化主義理論におけるエンクレーブ・間・ハイブリッドという二階建ての論理と外見的には同型である。しかし、(コミュニタリアンの想定するような) 規範やカテゴリーを共有し等質性に



よって統合される共同体 (enclave) とは異なっており、交響圏はむしろ彼我の異他性によってこそむすびつく関係をさしており、「かけがえのない他者との、間身体性にもとづく、離脱の自由を保障された関係」を含意する点では親密圏概念とかななる。けれども、親密圏が私的領域に隠蔽されてきた問題を告発するとともにオルタナティブを模索するための政治性をおびた概念であるのに対し、交響圏は他者存在の歓びとしての面を分析的(理念的)に再構成した規範概念である点で、両概念は決定的に異なる。この見地からふたたび見田の論述にたちもどると、交響圏の理論上の偶発性と潜在的開放性という読解の可能性がうかびあがる。全体社会(ルール圏)における相互承認はいかにして可能かという社会構想のアポリアに対して、見田の認識と感覚は従来の規範主義的な解決とは別様の理路を示しうる。異質な他者の存在は歓びでもあるという認識を、あえて強調することで社会理論にくみいれる余地を確保し、近代の社会科学の大前提にあるホッブズ (T. Hobbes) 的な人間観=他者感覚に修正をせまる一種の異議申し立てとして、見田の社会構想は読まれねばならない(図参照)。

第7章では、社会構想の社会学はいかなる作風 (style) によって可能かという問いを背景におきつつ、その手がかりが見田の文体に求められる。思想や理論や方法論と文体とは不可分の関係にある。このことをつよく自覚していた見田は、イメージの論理によって誤読をひきうけてでも人々を触発することを選択した。また質的分析論において、柳田国男や宮沢賢治や石牟礼道子のように、個我の裂開という受動的な体験をつうじて他者の内的世界を共有することを方法としていた。科学と社会の関係が長期的な地殻変動のさなかにある今日、社会科学の文体=方法論の多様性を模索するうえで、社会構想の社会学は、非言語的メディアふくむさまざまな作風が毀誉褒貶の渦中で試行錯誤される実験場の様相を呈することになると展望される。

終章「見田宗介から社会構想の社会学へ」では、本稿でえられた知見がまとめられたのち、見田の所説の読解から提起される社会構想の社会学の理論的諸課題として、ホネット (A. Honneth)、イエッギ (R. Jaeggi)、ローザ (H. Rosa)、柄谷行人、熊野純彦、ウォーラーズティン、ハート (M. Hardt) とネグリ (A. Negri)、ポストン (M. Postone)、ピケティ (T. Piketty)、ハーヴェイ (D. Harvey)、岩崎信彦、斎藤幸平、ブーバー (M. Buber)、レヴィナス (E. Lévinas)、バウマン (Z. Bauman)、野口三千三、ホール (E. T. Hall)、木村敏、花崎皋平、マルクーゼ (H. Marcuse)、バタイユ (G. Bataille)、フッサール (E. Husserl)、ニーチ

エ (F. Nietzsche), 竹田青嗣, フロイト (S. Freud), ラカン (J. Lacan), 作田啓一, フェミニズム, 正義論, 公共性論, 承認論, 所有論などの諸理論・学説との接続ないし展開可能性が列挙される。近代のあとにくる時代の社会学のあり方を模索するとき, 見田がさし示そうとした社会構想の社会学という可能性は, たえず気づき (inspiration) をあたえてくれる一素材でありつづけるだろう。